

The image features a dramatic landscape with the dark, intricate silhouettes of several leafless trees against a soft, hazy sky. The sun is low on the horizon, creating a warm, golden glow that filters through the clouds. The overall mood is contemplative and serene.

新家完司三二句集

春夏秋冬

新家完司（しんげかんじ）

川柳塔社理事長

毎日新聞鳥取柳壇選者

「大山滝句座」世話人代表

著書

新家完司川柳集「平成元年」

新家完司川柳集（2）「平成五年」

新家完司川柳集（3）「平成十年」

新家完司川柳集（4）「平成十五年」

新家完司川柳集（5）「平成二十年」

新家完司川柳集（6）「平成二十五年」

「川柳作家全集 新家完司」

「川柳の理論と実践」

はじめに

元号というものに特別な思い入れなどはない。「平成元年」が「オンリーワンでキリが良い」と思ったので、最初の句集のタイトルの拝借しただけのこと。以後はご覧の通り、楽な道を選ぶ横着な生き方がそのまま現れている。

来年は「平成三十年」であり、第7集を出すタイミングになるが、「平成三十年」とするか、新しい元号を借用して「〇〇元年」とするのか思案中である。

【春】

さくら咲く今は死にたくない季節

横丁を曲がれば住所不定なり

花の下につぽんじんは靴を脱ぐ

ともだちを数えて歩く花の下

ふっくらとうまいお墓の裏の露

小雀が飛ぶ位置さえも遥かなり

菜の花や柩の中はあの世にて

わたくしがすっぽり入るゴミ袋

赤ちゃんはまだしあわせでよく笑う

口笛がかすれる明日を思うとき

わたしより少し大きい河馬の顔

自転車に春の空気を入れてやる

鯉のぼりまたこの国が好きになる

【夏】

新しい朝の光を召し上げれ

あじさいに埋もれ小さな理髪店

天国はこんなものかな金魚鉢

坊さんのころもさやさや涼しそう

初夏というのに自転車が錆びている

いい人ばかりと錯覚しそーいい天気

陽光を集めて猫の轆死体

削岩機むかしの俺のような音

ともだちも元気たのしい日が続く

夕暮れの電車の音を聞きに行く

目の前の人とかなしいほどの距離

霧が出て街は水族館になる

【秋】

いっこうに古くならないお月さま

恐竜が見たのと同じお月さま

樹のことば鳥のことばは難しい

樹は頭が良くて歩き回らない

仔犬ほど可愛くはない他人の子

いっしんにうごくめしくうひとのあご

脂身の甘さこの世は捨て難し

夕焼けの似合う歳にとなりにけり

秋が澄んで人の言葉がよくわかる

自画像を描けばブリキの古バケツ

ムーミンの絵葉書だれに出してやろ

酒という字が夕暮れにポツと点く

【冬】

この世とは冷たい雨の降るところ

さびしい日さむい日くらい日と続く

傷ついていないふりなら慣れている

あたたかい息をしている木の玩具

哀しみの年輪がある象の足

しあわせな人は静かにしてほしい

寂しくて水族館へまぎれ込む

海鳴りよ人は激しく老いてゆく

海に降る雪の如くに無力なり

雪の日の少し華やぐおとむらい

こめかみに銃口あてる日は来るか

行方不明という消え方も選択肢

ト口箱の蟹も死ぬのを待つばかり

新家完司ミニ句集
春夏秋冬

発行人 新家完司

編集所 川柳塔社 WEB サイト

<http://senryutou.net>